
用心棒は厄介者！？

烈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

用心棒は厄介者！？

【Nコード】

N5746C

【作者名】

烈

【あらすじ】

この話は、桜牙優斗おつがゆうとと言う少年が、両親の雇った東海道拓弥とうかいどうたくやというとてもやっかいな用心棒に振り回されるという話。

第1話・用心棒Ⅱ変人？

「フワアアア。眠い……。。」

俺は、桜牙優斗^{おうがゆうと}。ばりばりの中学三年です。

「今日はあいつが喜ぶのにしないとなあ。」

あいつ、確かミートソーススパゲティが好きだったよなあ。ミートソースとパスタはあるから

良いだろ。彼奴つてのは、義理の母さんの子供、ナンだけど……。まあ帰ってからの楽しみだ。さあ、帰って昼寝だ。

「ただいまあ。」

「オツカエツリナッサイ。優斗兄ちゃん。」

「おう。ただいま。」

此奴がさっき話してた義理の弟の桜牙翔太^{おうがしょうた}。二番目にやっかいな奴だ。

「にいちゃん。今日の晩ご飯何い。」

「お前の好きなミートスパゲティだぞ。」

「やったぜえ。」

此奴がやっかいなのは、多重人格。今みたいにとっても優しそうなと

きもあれば、とても怖そう
なときがある。俺でも手が付けられない。

ただ、この中で一番やつかいなのは……、あの人だ。

「あのねえ。今日はねえスパゲッティなんだよ。」

「……………。そうか……………」

暗いな、おい。

「すみません。拓弥さん。きょうは翔太が好きなを作ります。」

「……………、俺は何でも良い。」

相変わらず無口だな、おい。

彼は、東海道拓弥^{とうかいだうたけ}さん。俺達の用心棒。魔界から来たらしい。何で用心

棒が居るのかって。俺達の母さんと父さんは、スイスに住んでるんだ。そこに俺の父さんが社長の会社があるから、スイスに居るんだ。

翔太の世話役も担当してもらってる。

「兄ちゃん。早く御飯作ってよお。」

「わかったわかった。今作るから。」

ああ。これで今日の睡眠時間が削られる……………。

「兄ちゃん。あのねえ。」

「うん。」

ビシュ

何をしたんだ……。

「あははは。おもしろーい兄ちゃん。」

「晩飯抜きにスツぞ。」

「イゝヤゝダア。」

すぐにこねる。これが多重人格のひとり、「こね翔太」だ。

「じゃあもうやめろ。いいな。」

「ハイ」

なんか、今日は誰かが来そうな雰囲気だ。

ピンポン

玄関からということとは……。

「優斗くん。」

まさかこの声は……。

「茜さん。なんですか。」

「いやゝ。良いにおいがしたからさあ。」

この人は、かんざきあかね神崎茜さん。大学二年って言ってたかな。つーか、あんなだけ凄いんだよ！！

「何か言ったア？」

にたあ

「何も言ってますん……。」

怖ええええ……。逆らえないな……。

「今日もごちそうしてくれるよね？」

「はい。そりゃ勿論ですよ。」

はあああ。この人が来ると食費が……。

「あ、茜お姉ちゃんだあ。いらっしやゝい。」

「こんばんは。翔太君。」

「こんばんは。茜さん。」

あ、出てきた……。拓弥さん。

「人生ゲームしよあ。みんなでさあ。」

「そうねえ。しましうか。」

「あ。俺パス。」

こいつらと人生ゲームすると何かしらやっかいなんだよな。

「私も混ぜてくれますか。翔太さん。」

「うん。みんなでやろう。」

散らかさなきゃいいけど……。

「テレビでも見てよーっと。」

一分後……。

なんか、弟の部屋が騒がしいな……。ナンだよ。まだ一分ぐらいしかたってねーぞ。

「にいちゃん。拓弥さんが人生ゲームのボードを壊しちゃったよお！」

ナニツ。まさか、順番を最後にしたんじゃ……。

「うん。ジャンケンで負けたから拓弥さんが最後……。」

大変なことしちゃったよ。おい……。
（拓弥は順番などが最後になると暴走して手が付けられ

なくなります。)

「いま、茜さんが必死に押さえてる……。」

凄いな茜さん!!

「早くう。」

「おう。」

弟の部屋に行ってみると悲惨なことになっていた。

「早く止める!! 押さえているのが精一杯だ!!」

十分凄いです!!

「えーと……。翔太。水持ってこい。コップ一杯で良い。」

「うん。わかった。」

よし。これで拓弥さんは止めれるけど、ソレまで持ちこたえられるか……。

「ちょっと、あんたも押さえないよね!!」

「ああ。すいません。」

俺も暴走した拓弥さんを止める。

「兄ちゃん。」

翔太が来た。これで暴走が止められる。

「スイッチに届かないよ!!」

ハイ？何て言いました。

「だから!!スイッチに手が届かないっていつてるのぉ!!」

マジですかぁ!!

家は水道がボタン式

「優斗!!ここは任せて水を取りに行くのよ!!」

「はいわかりました!!ここはお願いします!!翔太!茜さんを手伝え!「怪力翔太」になればいけるだろ!!」

「うん!わかった。」

凶暴な拓弥さんの取り押さえに茜さんと翔太が頑張ってる間に・・・。

「げっなんだこれ。」

ここの居間もまた悲惨な光景になっていた。

「後で片付けないとな・・・。」

ソナなことより、水を取りに行かないと、茜さんに殺される・・・。

水をコップ一杯に入れこぼれないように慎重に運んでいく。

こぼさないように慎重に慎重に・・・。

バシヤ

「・・・・・・・・。」

早速こぼしちゃいました

「早く取りに行けえ！！優斗おおお！！」

「はいイイイイ！！」

俺はカラになったコップを持って炊事場に急ぐ。

フンフン

ナンか焦げ臭いな・・・。ハッ、ミートソースを温めてたことを忘れてたああ！！

俺は急いでコンロの火をとめた。

ふう、危なかった。後一步で弟に殺されるところだった・・・。

さてと、水を持っていかないとな。

俺は二回目の水くみをして、弟の部屋に持っていった。また災難が俺のみに降りかかった。

ドスン！！

俺の足に弟の膝が思い切り直撃したのだ。

「いってええええええええええ！！！！！！！！」

バ
シ
ヤ

・
・
・
・
・
○
バ
シ
ヤ
？
？

「ねえ……。何でもまた失敗してるの……。」

かかった相手が悪かった。茜さんにかかってしまったのだ。

「水くみにいつてきマース……。」

「早くね。」

ああ。やばかった。殺されるかと思った……。

俺は、本日三回目の水くみへ行つた。

ジャ

ポチ

さてと、早く持っていくか。悲惨な状態になってなきゃ良いけど。

「水を持って来ました！茜さん、翔太！」

「早くぶっかけろお!!」

バシャ

「あれ……。私は何をしていたんでしょう。思い出せません……」

「あれだけのどんちゃん騒ぎしてたのに!!」

そう。こんな事があるとその時の記憶は全く残ってはいないのだ。
ナンツ―迷惑な話だろう。

「さあ、みんな晩飯の前にここの部屋と居間片付けをしてもらおう
か……。拓弥さん。茜さん、翔太。」

「えー! 御飯食べてからで良いじゃん。」

「そうだぞ優斗! 後でも良いだろ。」

「良いカラしろよ!」

「はい……。」

よし。これで部屋も片づくだろ。さてと、俺は茜さんと一緒に居間の掃除をするか。

ただ、晩飯を食べるのが十時過ぎになるとは思いもしなかった……。

第1話・用心棒「変人？」（後書き）

作者の烈です。これで一作品目になります。ふつつか者ですが、宜しく願います。

連載です。「用心棒は厄介者!？」を宜しく願います

第二話・夏休み

今年の夏休みもあと少し。今年こそはのんびり行きたいなあ。

「ニイチャーン！」

そらきた。どうせまた、宿題の手伝いでもしろってんだろ。

「宿題なら手伝わないぞ。」

「違うよあ。ねえ、明日さ、海行くでしょ。」

夏休みも最後に近いから拓弥さんの車で一時間近くの海に行くことにしていたのだ。

「それが、どうかしたのか。翔太。」

「水着がちっちゃいんだあ。」

ぶっ。

「兄ちゃんいま笑ったでしょ。」

あれ聞こえてたみたいだ。

「おまえさ、スクール水着で良いじゃん。今年買ったバツかだろ。」

「違うの。プライベート用の水着が欲しいんだ。」

ふーん。別にいらない気もするけど俺も水着買わないとな。

「じゃ、今日買いに行くか！翔太！」

「やったぜえ！これで友達に自慢できる。」

ふん！といい、とても上機嫌な翔太。

「拓弥さん。拓弥さんの水着まだ着れますか？」

「・・・・・・・・。」

着れないんだな……。まあ、わかってたけどな。

「じゃあ、今日水着買うんで、一緒に選びませんか？」

と拓弥さんに聞く。いつもなら行かないと言うが、今日は違った。

「私も行きます。」

決まりだな。

「拓弥さん。車の運転宜しくお願いします。」

今日はちよつと遠いデパートに行った。こっちの方が種類が豊富だからだ。翔太は車に乗ってるときにも、「やったぜえ！」とはしゃぎまわってた。

「つきました、優斗さん。翔太さん。」

黒塗りのベンツに揺られること一時間。

「兄ちゃん！拓弥さん！早くう！かつこいい水着買うんだからあ。」

「ハイハイ、わかったからその前に昼飯食うぞ！」

「ハイイ！」

さーてと、何処で食うかな・・・。

「兄ちゃん。ハンバーグバーガが良い。」

「よしよし、ハンバーガーな。」

やっぱりそうきたか。俺ハンバーガー大嫌いなんだよね。まあいいか。

「拓弥さん買ってきますんで何が良いですか。いつもの良いですか？」

「ああ。いつもので良い・・・。」

「僕は・・・。」

「スペシャルバーガな。」

さてと、おれは翔太を拓弥さんに任せ、俺はハンバーガー屋に行った。

「えーと、ダブルチーズバーガーセット一つと、スペシャルバーガ

ーセット一つで、あと単品でポテトとナゲットください。」

「かしこまりました。」

と、無料笑顔をもらい、拓弥さん達の所へ帰った。

「帰ってきた、早く兄ちゃん!!」

この二人は思いも寄らぬ早さでハンバーガーを一分で間食した。スゴッ!

「食べ終わっただし水着を買いに行くか。」

「うん。買っ買っう!」

水着売り場コーナー

うーん、俺はこれにするかな……。これで良いかな。けっこーかっこいいし。俺のからは黒い下地に赤と青の龍が描かれているというものだ。

「兄ちゃん。これでいいや。」

「私はこれで……。」

えーと、翔太のは……。黄色の下地に思い切りアンパ マンのトリオがのっている。

「翔太。これはやめた方が良いと思うけど……。」

「これがいいの．．．。」

弟のセンスのなさにちょっと悲しい気がする．．．。トホホ．．．。
次は拓弥さんのえをみる。

「．．．．．。」

「．．．．．。」

さすがの翔太もビックリしているようだ。なぜなら．．．。

「いかがでしょう．．．。」

ドラエ ンのキャラが勢揃いの水着を持ってきたのだ。

「拓弥さん。ソレはやめた方が良いと思う。」

「僕も思う．．．。」

と、翔太。てめえも人の事言えねえよ！

「俺が選ぼうか？」

「お願いします．．．。」

「じゃあ、それ返してきて。」

「はい．．．。」

ふう。アブねえ。後一步で変態に見られるかと思った．．．。

「返してきました。」

「うん。」

俺が思うに、拓弥さん黒とかに合うから、黒の生地だけの海パンにした。

「これで良いよね。拓弥さん。」

「はい。」

きまりっと。んじゃ、会計しますかね。

「合計五千五百五十円です。」

ハイハイ……。って、ええ！何でトリプル五！！ラッキーな五なのかおい！！

「有り難うございました。」

さあ、買うものも買ったし帰るか。

「帰ろ〜。早く家に帰ろ〜。」

「ハイハイ。」

ということで、明日の海に備えてサッサと帰る俺達だった。

第二話・夏休み（後書き）

遅くなりました。これからも宜しくお願いします。

第三話・夏休み・続編・その弐

ピンポン

「アツ友達だ！行ってくるね」

「うん。」

今日は弟が待ちに待っていた海に行く日が来た。

「おじゃまします。」

「イラッシャイ。」

そう軽く言い、コーヒーのおかわりをしようと席を立った。

「ああ。座って良いよ。まだ全員集まってないから。」

「はい。」

礼儀正しい子だなあ。あんな奴が弟が良かった。

「僕の部屋に来て！」

「うん。」

ふう。お菓子でも出すかな。ん、そっぴや拓弥さんは何処に行ったんだ？まだ寝てるのかな？

「おはようございます．．．。」

「おはようございます。」

今日は機嫌が良いみたいだ。いつもなら．．．。

「拓弥さん。拓弥さん！」

「うん．．．。」

ゴスッ

という感じで蹴ってくるのだ。昨日の蹴りは痛かった．．．。

「私にも珈琲入れてくれますか？」

おっ、かつこいいじゃん。漢字でコーヒーなんてさ。

「はいよお。」

俺は拓弥さんの分までコーヒーを入れる。

ピンポン

「翔太でろお。」

「ハイ。」

．．．．．。

〓〓一時間後〓〓

「揃ったか。翔太。」

「うん。揃ったよ!」

じゃあ、行くか。

「行くぞオ!」

「「「「おーーーーー!!!!!!」」」」

「じゃあ、下に降りて車に乗れ!」

「ハイ。」

今から、海へ行く……。どうなる事やら……。

〓〓一時間後〓〓

「着いたぞオオオ!!!!!!」

やっと海に着いた俺達。一応、翔太の仲間を紹介しよう。

一人目

いまいけたくと
今池拓人スポーツが得意と言っていた。

二人目

かんたりにようすけ
神田亮介。こいつは、顔が良い。限りなくな……。絶対もてる。
ちなみに、茜さんの弟らしい……。かわいそうに……。

三人目

黒沢俊哉。こいつは勉強ができる。なんか、高三の勉強ができると
かできないとか……。。

一時間後……。。

そろそろ「腹減ったー。」とか言ってくるだろ。弁当の用意しとく
か。

「にいちゃ……。。」

「ほら弁当。持ってきたから、みんなで食べようぜ。」

「よっしゃー！みんな、兄ちゃんの料理はおいしいんだよ。」

中々うれしいこと言ってくれるじゃねーか。

「さっ、みんな腹減ってるだろ？早く食べな。」

「「「ハィ。「「「」

うん。今のは翔太が入ったからな。拓弥さんじゃ無い。そーいや拓
弥さんは何処に……。。

「へーい、彼女……。一人？」

「いえ違います。。」

。ナンパ中でした。しかも失敗しちゃってるよ……。虚しいな……。

「拓也さん。飯つすよ。食べないんですか？」

「いえ、頂きます。」

「はい。これ皿です。」

「面目無い。」

ふう……。俺ため息ばかりだな……。

「兄ちゃん。食べ終わったからみんなの分のお金ちょうだい。」

「あ？何で金があるんだよ。」

「かき氷」

成る程ね。だからみんなの分も買うつて訳か。

「翔太あ……。俺達別に良いよ……。」

「何でみんな食べたいっていったじゃん。」

「ちょ……。翔太あ……。」

ふーん。俺に気を遣ってるって訳か。別にかき氷ぐらいの金ならだすけどな。

「気にしなくて良いよ。出すから。何円だ、翔太？」

「二百五十円」

千円で足りるか。

「ほい、千円。おつりもってこいよ。」

「ハイ！みんな行こう」

「翔太、良いのか？」

「いいのいいの。早く行こう？なくなっちゃうかもしれないよ。」

「すいません。お兄さん。」

ほお、ホントに気を遣ってやがる。礼儀正しいな。

「いいよ。翔太から誘ってきたんだ。別に良いって」

「ありがとうございます。」

「行くぞお！」

元気がいいな。サッサと片付けて寝るか……。ふあ、眠……。

「にいちや〜ん。」

この間抜けな声は……。

「はいお釣り。」

「はいはい、かねたりたか？」

「バッチ！足りたよ。」

「おゝそつか。良かった。」

「んじゃ、寝るか。」

「あのさあゝ……………」

「ペチャクチャペチャクチャ

ウルセエ……………」

「おい。お前らちよつとうるさいぞ！」

「はい。」

「つたく。これでやっと寝れる……………」

「デモ兄ちゃん……………もう夕方なんだけど。」

「ナニイイイイ！！！！」

「……………夕方……………」

「さっ、帰りましょうか。」

「うん。」

「荷物は積んであります。着替えて駐車場に来てください。」

「はい。」

俺は何をしに来たんだろう……。こいつらのせいでエ台無しだあ！！

「兄ちゃん。帰らないの？」

「帰る……。」「

このまま、友達を送った後、カラオケや買い物などに付き合わされたのだ……。

第三話・夏休み・続編・その弐（後書き）

今回はコメディーがあまりはってません。

コメディーなのにすいません。

優「ホントわりいな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5746c/>

用心棒は厄介者！？

2010年10月28日03時40分発行